




## 審 査 結 果 の 要 旨

報告番号	甲 第 / 303 号	氏名	森 敦
審 査 担 当 者	主 査	三浦 充志	
	副主査	赤木 由人	
	副主査	井田 弘明	
主論文題目： Evaluation of Serum Calprotectin Levels in Patients with Inflammatory Bowel Disease (炎症性腸疾患患者における血清カルプロテクチンの検討)			

### 審査結果の要旨（意見）

炎症性腸疾患の活動性指標として糞便中のカルプロテクチン測定が近年保健適応下で活用されている。本研究では、より簡便に採集が可能な血液におけるカルプロテクチン測定の応用性について、204 症例をもとに検討を加えている。結果として、血清カルプロテクチンはクローン病と潰瘍性大腸炎共に増加を認めるも、活動性との相関性はクローン病に特異的に認める事を見出している。これまで用いられている CRP 等と組み合わせる事により、多角的解析を可能にしてクローン病の活動性をよりの確に評価できることが期待される。また、血液を用いる事により患者さんの負担を最低限に抑えて評価でき、QOL 向上に非常に貢献できる可能性も秘めている。よって、本研究は学位論文として、臨床的重要性が非常に高いものであると判断される。

### 論文要旨

近年、炎症性腸疾患の疾患活動性マーカーとして便中カルプロテクチン測定の有用性が報告されている。しかし、炎症性腸疾患において血中でのカルプロテクチン濃度を測定した報告は極めて少ない。今回、炎症性腸疾患患者において血清カルプロテクチン濃度を測定し、バイオマーカーとしての有用性を検討した。2016 年 7 月～2018 年 4 月の間に久留米大学病院炎症性腸疾患センターを受診した患者 204 例（潰瘍性大腸炎（UC）99 例、クローン病（CD）105 例）と、健常人 92 例を対象とし血清カルプロテクチン濃度を測定した。血清カルプロテクチン濃度は CD（mean±SD,  $2.85 \pm 1.83 \mu\text{g/ml}$ ）と UC（ $2.97 \pm 2.08 \mu\text{g/ml}$ ）であり、健常人（ $1.31 \pm 0.96 \mu\text{g/ml}$ ）よりも有意に増加していた。CD では活動期で寛解期よりも増加し（ $p < 0.001$ ）、さらに CRP（ $p < 0.001$ ）および HBI（ $p < 0.001$ ）との相関も認めた。一方 UC では血清カルプロテクチンと partial Mayo score（ $p = 0.18$ ）との相関はみられなかったが、CRP（ $p = 0.006$ ）との相関を認めた。血清カルプロテクチンの測定は、炎症性腸疾患、とくに CD の活動性評価に有用であった。UC での意義についてはさらに検討する必要がある。